

図書館報

宮城高等学校 図書
黒川高等書 仙石玉祥
題字・仙石玉祥
印刷 中村印刷

「国語便覧」を手掛かりに

主幹教諭 遠藤 俊樹



あれは、たぶん中学3年の時だったと思う。テレビで大宰治の半生を描いたドラマをやっていた。国語の教科書に『走れメロス』が載っていて名前くらいは知っていたので、何となく見ていた気がする。今考えると当時高校受験を控えており、テレビドラマに現を抜かず余裕などなかったはずであるが、何となく大宰治という人間に興味を持って見ていた。記憶が曖昧なので、インターネットで調べてみると確かに私が中学3

年の10月から1月にかけて金曜日の夜10時から放映されていたようである。ちなみにこの時期の金曜日の夜8時から「3年B組金八先生」の第1シリーズが放映されていた。これも見ていた記憶があるので、当時の私はテレビっ子だったのかと思う。そういえば、あまり受験勉強をした記憶がないなあ。テレビドラマを通じて、大宰治という人物に興味を持った。しかし、このことがきっかけで本を読むようになったわけではない。中学生当時の私は、読書をする習慣はなく教科書以外の本を読んだ記憶がない。私が読書をするようになったのは、もうしばらく後のことである。

何とか無事に高校受験を終えて、高校に入学すると電車通学をするようになった。部活の朝練があったので、毎日朝早い電車で通学していた。朝早い電車なので、余裕で席に座ることができた。電車に乗っている間の十数分間何もすることがないので、本でも読もうかと学校帰りに本屋に立ち寄ってはじめて手にしたのが、大宰治の『人間失格』だった。テレビドラマを通じて大宰治に興味があったのとそのタイトルに何となく惹かれたのである。それからというもの大宰治の作品を片っ端から読み耽ったのである。

こうして毎朝、電車の中で読書することが習慣化すると次々に本を手にしなければならぬ。何せ、電車に乗っている間の暇つぶしである。今ならスマホを手

手にすればいくらでも暇つぶしができるのだとは思いますが、当時は、スマホもコンビニもない時代である。そんなときに役に立ったのが、「国語便覧」である。「国語便覧」には、著名な作家とその作品が紹介されており、夏目漱石の『こころ』、『吾輩は猫である』、『三四郎』、川端康成の『雪国』、『伊豆の踊子』、芥川龍之介、井伏鱒二等々々図書室から借りて読むようになっていた。「国語便覧」を足掛かりに本を読んでいたのも、文学作品に片寄っていたのである。

就職してからは、ずっと自動車通勤なので「朝読書」の習慣はなくなってしまうが、今でも時折本屋を訪れてパッと目に入ったものやテレビや映画化されて話題となった本などを読むこと

が多い。たとえば、最近では池井戸潤原作のテレビドラマ『下町ロケット』を見て『七つの会議』と『空飛ぶタイヤ』を読んだ。本を手にする機会はめっきり減ったが、読み始めると一気に読んでしまう。

私は、高校時代に「国語便覧」を手掛かりに読書をするようになった。それが今の私にどう影響しているかはわからないが、みなさんも偉人の遺した名作といわれる作品を手にとってみてはいかがでしょうか。



本校で使用している国語便覧「カラー版 新国語便覧」(新版三訂) 第一学習社